



株式会社studio-L代表、
コミュニティデザイナー
山崎 亮

社会福祉法人長岡福祉協会
高齢者総合ケアセンター
こぶし園総合施設長、看護師
吉井靖子

株式会社高田建築事務所
代表取締役、建築家
高田清太郎

地域包括ケアのまちを歩く
コミュニティデザインの視点で読み解く
ケアのまちづくり

第3回 自分が高齢者になったときに暮らしたいまちをつくる

新潟県長岡市・社会福祉法人長岡福祉協会
高齢者総合ケアセンター
こぶし園・
サポートセンター 摂田屋

既存の大規模特別養護老人ホーム（以下、特養）の型から「逸脱」する道を選んだ高齢者総合ケアセンター「こぶし園」。「普通の暮らしをめざす」。そんな活動を支える根っこには何があるのか――。

人の出入りがさかんなら、いま健康な人も入りやすい

山崎 こぶし園が居宅サービスやサポートセンターというシステムをつくった。では、この地域に住んでいる、今は健康な人たちは、そこにどう関わっていくのでしょうか。

吉井 一般的に、老人ホームとか福祉施設はマイナスイメージを抱かれがちで、皆さんの間にできれば入りたくないという思いがありますよね。だから、いざそういうものが必要となったときに、抵抗なく「あそこなら行ってもいい」と思えるように、普段からの地域の方々の交流を心がけて、いろんな住まい方があるということ、私たちから地域の方に伝えるようにしています。

さらに、サポートセンターへ地域のボランティアの方々に積極的に入ってもらうようにしています。その方々は、いずれサポートセンターを利用する可能性のある方々でもありますから、福祉施設のイメージを取っ払って普段から通い慣れてもらふことと、上げ膳据え膳にはせず主体的に動いてもらうことを意識しています。イメージづくりは、たとえば、インターネットや飾りひとつとっても、幼稚な感じを受けないように工夫しているんです。自分が入るとなったら、いやじゃないですか。

主体性というと、ボランティアとしてやってもらうことは一応決まっています。が、それ以外は、いつ来てもいいし、い

つ帰ってもいい。適当な時間にどうぞ勝手にお茶を飲んでくださいというスタンスです。そうすると、いつの間にかやることを終えて、おしゃべりして、お茶碗を洗っている。普段から、社会資源としてサポートセンターを使ってもらふことを意図しています。

山崎 ボランティアの方々はどんなことをしてくれそうですか？

吉井 お掃除ですね。あとは会話ボランティア。

高田 お茶飲みボランティアもあります。お茶飲みしていると、人が集まる。そういう光景、ここではけっこう見ますよね。

山崎 ボランティアの方はどうやって増えていくんですか？

吉井 口コミです。利用者から聞いたり、ほかのボランティアの方から聞いたり。高田 80代の方が、「自分も年をとったからお世話になるから」と言って来られますよ（笑）。実年齢と精神的な年齢にはどうもギャップがあって、支える側の人というのは、自分はいつまでも若いと思っているんです。だから、ボランティアにも次々参加してくれて、平均年齢77歳。皆、シャキシャキしていますよ。

吉井 高齢でも、お元気な方がたくさんいるじゃないですか。それなら家にも仕方がないということ、これから働くのは難しいけれど、ボランティアで地域のつながりや健康を維持したいと思われるのかもしれない。

高田 人間の欲望にはいろいろあるだろうけれど、意識の有無にかかわらず本能的に人のために役に立ちたいというのがいちばんの欲望なのでしょうね。そうすることに自分の存在意義があるというよ

うな雰囲気、この地域に芽生えるといいなと思っているんです。

山崎 それ、施設ではなくまちでやることのメリットかもしれないですね。大規模な介護施設にはなかなか入りにくいけれども、誰かがしょっちゅう出入りしているし、近所を訪問してまわっているし……となると、自分も関われそうな感じがしてきますよね。

吉井 それから啓発のための介護教室や体操教室などのイベントも、地域との関わりで重要ですね。サポートセンターはどこでもやっています。認知症に関心が高い方が多いので、オレンジカフェや薬の講演会なども開催しています。

表●故・小山剛氏のメール (2015年2月21日付)

小規模の創設、楽しかったですね～。毎日がドキドキワクワクの楽しいチャレンジの連続でしたし、本当に素晴らしい仲間たちとの出会いに感謝・感謝です。「みんなでいい事を言いながら赤字に苦しむ会」なんて、そうありませんよ。でも、つよがりやせ我慢のおかげで、こんなに広がりましたし、これからも、地域包括ケアの中心になる素晴らしい事業だと思います。私はもう活動できませんが、その分皆さんが活躍していただけるものと期待しています。みなさんの優しい気持ちを大切にその日が来るまで前向きに生きていきます。素晴らしい仲間たちの事は忘れません。本当にありがとうございました。

※医療ジャーナリスト・大熊由紀子氏のメールマガジンより一部抜粋

高田 病気のこと「何でそうなるか」ということまで医療関係の人が話してくれるから、おもしろいのです。

山崎 いろいろな機能を発揮しているわけですね。

吉井 福祉教育や相談機能などの役割を果たせるような、地域の福祉拠点になっていきたいんです。サポートセンターには、看護師もほかの専門職もいますから、山崎 地域包括支援センターとの関係はどうなっているんですか。サポートセンターは、中学校区に1つずつくらいあるわけですね。

吉井 地域包括支援センターを長岡市から受託しているところが2か所あります。ほかにも、地域ケア会議に出て、担当の地域包括支援センターと情報を共有していますし、日頃から必要があれば、地域包括支援センターにつながっています。逆に、先方から依頼を受けることもありますね。サポートセンターは、利用者にとって、わざわざ地域包括支援センターへ行くなくても身近なところで相談できるという位置付けなのでしょう。

そうしたサポートセンターのような地域密着型施設には、2か月に1回、「運営

ではないので。

できない理由を100挙げるか、できることを1つ見つけるか

山崎 こぶし園に来た見学者の方々は「すごい取り組みだけど、私たちには無理です」と言われるそうですね。その人たちがいちばん無理だと思うのはどこなんでしょう？

推進会議」を開くことが義務づけられて

いるのですが、そこで地域の医師や住民の方々にお話をして、町内会にもち帰ってもらったりもしていますし、実習生もよく来たりするので彼らにオンブズマン的な第三者評価が期待できます。

山崎 しょっちゅういるいる人が入ってくるんですね。だからこそ、幼稚な環境づくりや言葉づかいにはできないわけですね。

吉井 対応が悪ければ、クレームも来ますからね。

高田 サポートセンターが主催するだけじゃなくて、逆に地域の文化祭など町内行事に参加する場合もよくあります。摂田屋地域には、他分野との関わりに積極的な町内会長さんがいて、町内行事がさかんなんです。ここをつくるタイミングにも話し合ったし、まちおこしも一緒にやっているんです。

そうやってサポートセンターがここにすることが、なんか自然になってきたんです。こういうまちは、時代と場所が要求してきたという気がします。だから、偶然じゃなくて必然的に生まれたといえるのではないのでしょうか。

吉井 ここに小山がいたとしたら、「その気がないだけです」って言うと思います。長岡という片田舎の一介の施設長ができるんだから、ほかでできないわけがない。ただ、したくないだけだった。

高田 ギャップがありますよね。そう言い切って本当にやる人と、言い切ってやらない人と、言い切れない人と。

山崎 やらない理由ばかり言う人と(笑)。

吉井 「できない理由を100挙げるのは簡単。その100を考える余裕があるなら、できることを1つ考えろ」って、小山はよく職員にも言っていましたね。できない理由は「金がない、人がない、アレがない、これがない」っていくらでも言えるけど、1つできることを真剣に考えろ、「できないわけがない」と。

山崎 そうですね。やりようによってはできるはずですよ。

吉井 私たちがやってるんだから、できないわけがない。

山崎 小山さんが亡くなる前にご友人に送ったメールで、とてもいい仲間に囲まれて幸せだったという言葉とともに「みんなでもいいことを言いながら赤字に苦し

山崎 ほかの施設で働いていた方がこぶし園で働くこともあると思いますが、どんな感想をもたれるんでしょう。本来はこちらのほうが普通なんですけど、こちらの施設の「普通」が世間一般には「異常」に感じられるようなことはありませんか。

吉井 そういうところはありますね。ただ、ほかの法人から来たスタッフは、ほとんど「こぶし園の方向性に共感して」と言ってきます。こぶし園を選ぶこと自体が、従来のケア論に疑問や不満を感じているということなのでしょうね。地域密着型とか、地域包括ケアシステムの勉強をしたいからと入ってくるスタッフはけっこういますよ。

高田 サポートセンターの開設時に、小山さんがここで説明会を開きました。ここに来ていたある福祉施設の方が、その話で共感してこぶし園に移ったそうです。「これが本当の介護だよな」と思ったと聞きました。

吉井 逆に、こぶし園を辞めていくスタッフというのはあまりいなくて、大体は結婚退職などですね。待遇が大きく違えば施設を移る人もいるでしょうが、それに関してはヨソとそれほど変わるもの

む会」だった、と書かれていたと聞きました(表)。正しいことをやるうという仲間が集まって、皆でどうやって金を捻出するかとってがんばり続けてきたこれまでだった、みたいな話。その覚悟があれば、できないことはないんじゃないかと思えますよね。できない理由を言う人たちは、金の要素、人の要素、制度の要素といろいろ言うかもしれないけれども、決してできないことではない。こぶし園だって、それを1つずつひっくり返してきたわけですから。

吉井 施設を運営する自分たちのためではなく、利用者のためにどうしたらいいのかという問いが、やっぱり根底にあると思います。

山崎 その意味では、亡くなった小山さんにこそ、長生きしてもらいたい、認知症とかになって利用してほしかったですね。そのためにやったんだから。80、90まで生きてもらって、「いい施設だなあ。ここは誰がつくったんだい？」って(笑)。

高田 彼の最期はやっぱり「自宅」でしたね。

吉井 有言実行でした。

高田 小山さんはすぐお酒が好きで、

註1 オレンジカフェ

「認知症カフェ」や「Dカフェ」とも呼ばれる。認知症のある人やその家族、医療・介護の専門職など集い、お茶を飲みながら気軽に話をすることを目的とした場。2015年に厚生労働省から発表された「認知症施策推進総合戦略—認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて(新オレンジプラン)」においても、その設置・推進が呼び掛けられている。



山崎 今の話は、その象徴ですね。
 吉井 サポートセンター構想や特養の分散という取り組みで、小山は本来の介護保険の趣旨を示そうとしたんじゃないかと思うんです。
 高田 小山さんが、「待機老人はゼロだよ」と言っていましたね。家族が待機しているだけであって、本人は待っていないというんです。だから、介護保険の趣

です。そのなかで特区に手を挙げたりと、いろいろなことが生まれてきた。こういうプロジェクトを各地で進めていこうと思ったら、自治体の理解は必要でしょうね。
 山崎 地域って、本来はいろんな人が住んでいるのが当たり前じゃないですか。それが福祉三法や福祉六法^{注2}などの法的バックグラウンドができ、財源がついたから施設をつくって、そこに福祉の対象となる人を入れるという歴史があった。だから、「家族で面倒がみられないから施設へ」ということは、ある意味、その時代の必然だったと思うんですね。それを単純に「もう一度家族に戻そう」としてもうまくいくわけない。だからこそ、家族に戻すというよりは「地域に戻す」。そのためにサポートセンターのような機能が必要だという。この流れは、すごくいいような気がしますね。
 地域には、そもそもいろいろな人がいる。若い人も、高齢の人も、健常の人も、

ちょっと心身が不自由になった人もいる。この雑多であることの意味みたいなものを、どういうふうに考えますか。
 吉井 それが普通じゃないですか。生きていくなかでの普通。
 山崎 具体的には、大規模特養はどういうふうに通じやなかったんでしょう。僕は経験したことがないので、特養の4人部屋の異常さは想像するしかないのですが。
 吉井 暮らしですよ。大規模特養の利用者の方が地域に帰ったときに、「見慣れた風景に戻った」という言い方をしていました。いろいろな事情がありますから、誰もが自宅に戻れるわけではないですが、たとえ自宅に戻らなかったとしても、住み慣れたところ、ご家族に近いところに住むということは、距離的・物理的な安心感があります。それがその人の生きる意欲にも影響がある気がしますね。
 高田 ほとんどそうなのですが、先日もまったく逆の事例を、私は聞いてしまいました。この地域に住んでいる人がサポートセンターに入ったんですけど、家族がすぐ近くにいてから、しょっちゅう家に帰ってくるんだそうです。それはす

私も一緒にさせていただくことが何度かありました。小山さんは、最後までブレないんですね。「金儲けのためにやるなら福祉施設をやっちゃだめだ。そんなんじゃないんだー」って、酔ってても言う。だから、そういう施設をつくってくれよって。こっちは酔っちゃって、うなずくだけになっちゃって。今考えてみると、福祉を志す者の使命感みたいなものを教えてもらいました。本当に楽しい旅だったねえ。
 吉井 うん。
 高田 誰のためでもない、自分のためだと言う。「利用者は自分なんだよ」って。これはすごい。ある意味で、愛の塊みたいな人だね。私も小山イズムを真正面から受け、取り組まさせていただきました。最初のころは、図面を持っていくと「これじゃただの施設だな」と却下されて(笑)。そのこぶし園が今、日本の地域包括ケアの先駆者のようになっていて、不思議な気がします。
 吉井 志が、思いが大きい人だった。
 山崎 自治体も、小山さんのやりとりのなかでその思いに動かされて、意識を変えていったところがあるかもしれない

旨からいえば、本来なら本人が申請すべきものだろうと。でも本人申請はゼロだそうです。
 吉井 本人が希望しているわけじゃないということですよ。
 高田 聞いたときは目からウロコでした。
 吉井 これは、単に特養が悪いとか、もう要らないということじゃないんです。特養だったとしても、部屋代は実費で払うわけだから、より住環境のいいところ、自宅に近いところも選べたほうがいいでしょう、ということなんです。選択肢が増えるのはそれだけで利用者にとっていいことで、自宅がダメならすぐに特養、それも大きくて遠いところに集められて……もう、そんな時代じゃないよね。
 小山はよく言っていました。「特養とか施設とかそんな関係なくて、いろいろ選択できればいいんだ。自分の暮らし方に合わせて」と。
 高田 そういう、境界線のない状態がいいのかなという気がします。ボーダーラインではなく、ボーダーゾーン。白か黒かじゃないグレーゾーンというのがすごく大きくあればいい。なかなか線で引けないものが、人間の心のなかにはあるん

まちに境界線はいらない

だろから。
 吉井 住民1人ひとりが、自分が年を取ったときにどういう暮らし方をしたいのか、どういう最期を迎えたいのかをしっかりと考えることができて、そのなかでいろいろなところを選べるようにということですね。そういうサービスを地域のなかでつくっていききたい。
 山崎 超高齢社会の地域づくりって、さまざまな要素が組み合わさってできあがるものなのでしょうね。高齢者本人がどう生きたいのかという想いに加えて、家族は高齢者本人とどう生きていきたいのか、地域住民は地域の高齢者たちとどう暮らしていきたいのか、そのうえで地域にどんな福祉サービスが必要になるのかを考える。そのとき、根底にあるのは「いざ自分も高齢者になる」という事実であり、大切になるのは「そのとき自分はどんな地域で生きていきたいのか」という想像力なのだと感じました。今日はどうもありがとうございました(了)。
 (2015年11月26日、新潟県長岡市・サポートセンター 梶田屋にて収録)

注2 福祉三法、福祉六法
 1950年代にできた生活保護法、児童福祉法、身体障害者福祉法のこと。これに知的障害者福祉法、老人福祉法、母子及び寡婦福祉法を加えて福祉六法といい、この福祉六法により社会福祉制度が整備されたとされる。



次の地域へ...